岐阜県中津川における自由民権と教育

――幕末維新期以降の思想的系譜との関連で――

三　羽　光　彦

はじめに

中津川地域は，幕末維新期に平田国学が浸透したが，平田国学に入門した人々のうちの多くが，1880年代の自由民権運動に参加している。青木健児が，中津川の自由民権の思想的系譜に国学が存在することを指摘する[1]など，この事実は，早くから注目されている。最近では，幕末期の国学を思想史・民衆史の上で再評価する動きがある。たとえば，芳賀登は，平田国学を経由して自由民権や社会主義の思想へと踏みこんだ「草莽」国学者の事例をあげ，平田国学のもっていた多様性と広がりを指摘している[2]。さらに，長谷川昇は，中津川における平田国学から自由民権への思想的移行を，当時の青年の思想形成過程として考察している[3]。

ところで，この当時の中津川の思想・学問状況を考察する際無視できないのは，明治初期に国学門人によって設立され，自由民権期には，啓蒙主義的な性格をもつ近代学校として発展させられた「興風学校」の存在である。この学校については，当初，国学門人の教育要求にもとづいて設立されながらも，近代的学校として形成されていく過程が，梅村佳代の研究によって実証的に明らかにされている[4]。梅村は，この郷学校が「国学運動の一環として」設立され，さらに「開明的な西欧知識の流入経路として」位置づけられていたと評価している[5]。そして，国学から民権論への移行については，「相矛盾するイデオロギーでありながら連続的に継承され，発展をとげたのではないか」と推論している[6]。また，堀浩太郎は，この時期一貫して「興風学校」の校長として重きをなした小林廉作に注目し，小林が「平田国学の素養の上に近代知識を修得し」[7]，啓蒙開化思想をもって学校教育を展開していったことを明らかにしている。

本稿では，こうした研究に学びながら，平田国学→啓蒙開化思想→自由民権思想と発展する中津川の豪農層の思想的変遷について，近代学校の形成過程との関連で若干の検討を試みたい。幕末から自由民権期に至る日本の近代化過程における地方豪農層の近代思想受容のあり方を解明する上でも，こうした思想的変遷に内在する諸契機を検討することは必要であろう。

Ⅰ　中津川における平田国学

(1)　平田国学の展開

伊那そして木曽から中津川にかけては，島崎藤村の『夜明け前』でも知られるように，幕末において平田門国学が盛んになった地域である。信濃・美濃の門人は，ほとんどが平田篤胤没後の門人であるが，国別で，信濃が最も多く627名，美濃が2位で375名といわれている[8]。中でも，伊那，筑摩，東濃地域では，あわせて564名が門人となっており[9]，全国でも最も平田国学が浸透した地域であった。中津川で没後門人となった最初は，苗木藩の出身で中津川で医業を営んでいた馬島靖庵である。馬島は一時伊那に住み，伊那国学の重鎮であった北原稲雄らと交流し，1856(安政6)年に，平田門に入門している。また，馬島が中津川の大組番役で酒造家の間秀矩の姉聟であった関係から，秀矩が同年に入門している。一方，北原稲雄の叔父にあたり，中津川本陣の市岡家に養子に入っていた

市岡殷政は，秀矩の紹介で1862(文久2)年に入門している。その後，幕末から明治初年にかけて，間と市岡は，中津川の豪農商を中心として平田国学を広める立役者となる[10]。

また，折からの尊王攘夷運動の高揚の中，間，市岡は，上京して尊攘派志士らとともに行動したり，1864(元治元)年に水戸天狗党一行が伊那から中津川へぬける際，支援を企てたり，あるいは1868(慶応4)年，東山道鎮撫軍が江戸へ向かった折，大垣まで赴き案内役をつとめ，信州上諏訪まで送るなどしている[11]。こうした活動は，中津川が中山道の枢要な宿場であったこととあいまって，中津川の住民に幕末維新期の社会変革の空気を身近かに感じ取らせることとなったであろう。

一方，山地が多く耕地が乏しいため，昔から江戸や尾張，上方などへ進出しようとする気風が強かったといわれる中津川の商人は，幕末期に，京都で生糸の買占めを行なったり，開港後，横浜で生糸交易[12]を企てたりしている。こうした中で，中津川の豪農商は国内外の社会的，政治的情勢に敏感に反応するようになっていったと思われる。とりわけこの時期に青年期をむかえたこれら豪農商の子弟は，若くして平田門国学に入門し，明治維新の変革の思潮の中で思想形成を行なっていく。

1863(文久3)年には，馬島靖庵の息子秀一，地主で村役人層の肥田通光・通一父子，間秀矩の息子元矩，大地主で製糸業を営み，のちに勝野製糸を興す勝野七兵衛などが入門，1865(慶応元)年には，七兵衛の養子吉兵衛や中津川屈指の大地主で，味噌溜醸造業と運送業を営む菅井家の養子となっていた肥田通光の実子の菅井守之介，地主層の高木伝兵衛などが入門している[13]。明治に入っても平田国学入門者は続出し，1868(明治元)年から1870(明治3)年までの間に12名にのぼっている[14]。中津川の平田没後門人33名中，明治期の入門者は3割以上を占めているのである。その中には，肥田通光の実子で菅井守之介の実弟である菅井三九郎，市岡殷政の息子政香などがいる。両人は，中津川在住の医者林淳一とともに，中津川自由党の三羽烏といわれ，1882(明治15)年をピークとする民権運動の中心メンバーとなる。

(2) 平田国学と啓蒙思想

間秀矩，市岡殷政以後の，幕末から明治初年にかけての平田国学入門者の入門時の年齢は，10代から20代と非常に若い。親兄弟の紹介など，地縁血縁を通して平田国学へ入っていったことが推定されるが，急速に西洋の近代思想が流入する中で，彼等は，平田国学をどのように受けとめていったのであろうか。

「平田国学熱が，これから約二十年後，潮が退いた様に消え去ったあとを受けて，明治十年代に今度は自由民権熱が，同じ中津川一帯に潮の差したごとく急激に盛りあがるという[15]」事実に注目した長谷川昇は，この点を「世代論的視点」から解明しようと試みている。中津川自由党の中心メンバーであった菅井三九郎は，1869(明治2)年，市岡政香は，1868(明治元)年，それぞれ15歳という若さで平田門に入門している。この点から，長谷川は，10代に入門した人々は「未だ主体的に平田学を己れのものとするには稚なすぎ」，「精神的自己形成を遂げるのは明治五年以後」の「文明開化の風潮の中」であったと推論している[16]。一方，勝野吉兵衛，高木伝兵衛など平田門入門時に30代を越えていた人々は，明治10年代には，「もはや思想的移行を必要又は可能とする年令[17]」ではなかったとし，それが，自由民権期に自由党へ結集するか否かの別れ目になったと論じている。

長谷川の指摘は，維新期の青年の思想形成のプロセスに着目したという点で，非常に興味深いものである。しかし，中津川において，「幕末期に平田学入門の好学者グループを形成し，それがまたそのまま二十年後の明治十年代に自由民権派グループに繋がっていく[18]」という事実については，「中津川に形成された《知識層グループ》[19]」としてしか，その共通性を捉えることができないと論じるにとどまっている。そして「平田国学はその学問的性格において，自由民権運動に発展的に結びつく内的契機を包蔵し

ていたかどうかという問題[19]」が，残された重要な課題であると指摘している。このように，学問的・思想的な特質を解明することを通して，平田国学から自由民権への思想的移行の内在的関連を問題とすることが，中津川の自由民権運動の性格を明らかにする上で必要なように思われる。

木曽・中津川の国学者は，一般的に，『夜明け前』の主人公，島崎正樹のイメージで理解されがちではなかろうか。平田国学の導く復古的イデオロギーを信奉する正樹の印象が強烈なことによるのであろう。正樹にしても，西洋の近代思想の流入の中で，思想的な苦悩に直面することが『夜明け前』で描写されている。しかし，馬籠の学校を充実させるために出かけた松本の師範学校での講習会では，世界地理や洋算などの近代的教育内容への反感を示す[20]など，啓蒙思想をかたくなに拒否している。

しかし，こうした傾向が中津川の国学者の一般的反応ではなかった。たとえば，中津川国学の中心のひとりであった間秀矩は，1869(明治2)年6月の日記の中で，国学が重視している記紀神話を近代学問との関係で，どう理解すべきかという疑問を，直接，平田銕胤に提出したことを記している。その一部は，以下のようになっている。

「古事記、書紀ノ説簡易ニ偏シテ，人ノ聞取ヨクセザレバ，御功徳ヲ解クニ要領ヲ得難シ，又海外万国ニ拡充シテモ間然ナ(ママ)ニキニアラザレバ，唯皇国キリノ説トナルベク，今日格物窮理ノ学行ルレバ，皇国ノ人ト雖，隘狭ノ説ニテハ疑ナキ事能ハズ，疑アルモノヲ以テ教トスルハ，誣ルニ近シ，高明正大ノ説ナクンバ，皇国ノ大道タヽザルニ似タリ，如何[21]」

こうした点から，北小路健は，「『新時代と国学』という問題意識において，秀矩と正樹は，かなり異なっていたと見るべきだと思う。(中略)秀矩が前向きの構えをとっているのに対して，正樹は非常に後向きの姿勢であったと見てよかろう[22]。」と論評している。

ところで，平田国学が政治思想のレベルではなく，学問内容において，単純な排外的性格をもつものであるならば，国学と近代学問との関係は問題にならなかったかもしれない。しかし，平田国学は，復古イデオロギーを単純に体系化しただけのものではなかった。平田篤胤の多くの書物は，復古的な皇国イデオロギーの教説に満ちていることは確かであるが，その教説を補強するために，キリスト教的世界観や近代科学の知見が，換骨奪胎されて援用されている部分がしばしば目につく。篤胤は自己の教説を合理化するために，当時の洋学の文献などからしきりに引用しているのである。たとえば，平田国学の入門書とされる『古道大意』(1824〔文政7〕年刊行)では，大地が球体であることを論じ，陸海の分布，五大州の区分などを詳しく解説している。これは，同書でも引用されているように，近世中期の天文学者西川如見や，蘭学を修め，当時の地理学の権威であった山村昌永の著作が参考にされているのである。また，江戸時代の日本の事情を詳細にヨーロッパに報告した書物として著名なケンペル(Engelbert Kaempfer)の『日本誌』の抄訳を引用して，ヨーロッパ人の日本観を詳しく紹介している。また，篤胤の代表著作である『霊能真柱』(1813〔文化10〕年刊行)でも，地球，月，太陽の直径と距離が，ヨーロッパ人の測量した数値として掲げられている。

従来，平田篤胤が漢籍を通じてキリスト教の世界観を熱心に検討していたことが指摘されているが，それと同様に，蘭学や洋学における近代科学の知見を，意欲的に吸収しようとしていたことも事実である。江戸時代後半の国学者の洋学受容と蘭学者の国学理解を分析し，「国学と蘭学の習合こそ幕藩体制を崩壊にみちびく一大要因であった[23]」と結論づけている佐野正己は，本居宣長没後の門人中，野々口隆正，岡熊臣とともに，平田篤胤の蘭学に対する深い関心にも注目している。たとえば，医道大意との別名をもつ『志都能岩屋』(1811〔文化8〕年稿本完成)で，『解体新書』を例示しながら，医学における解剖の重要性を指摘したり，当時の蘭医学の最先端を受容することを熱心に主張している事実をあげ，「近代学者平田篤胤の面目躍如たるもの

がある[24]」(傍点は原文著者) と評価している。

博覧強記といわれた平田篤胤の著作の対象領域は，歴史，地理，天文をはじめ医学，漢学，仏教論，キリスト教論など驚異的な広がりをもっている。しかも，ここで触れたように，洋学をはじめとする当時の最先端の学問的知識を盛り込んでいる。平田学が幕末期以降に，幅広く門人を獲得することとなった背景には，このような平田学のもつ百科全書的な性格もあったのではないかと思われる。西洋の近代思想や科学が堰を切ったように押しよせる幕末から明治初年にかけて，平田門に入門する中津川の若手国学者にとっては，平田国学の百科全書的性格が，ひとつの大きな魅力となっていたのであろう。たとえば，後述するように，明治初期に中津川の村内支配層の若手国学者が後援する「興風学校」の教則 (教科課程) は，啓蒙主義的な性格が色濃いものとなっている。すなわち，中津川の若手国学者にとっては，平田国学は近代思想や科学を受容する窓口であり，あるいはそれらを理解するための踏み台として機能した側面があるのではないかと思われる。

II　中津川の自由民権運動と教育

(1)　平田国学から自由民権へ

愛知県北設楽郡の古橋暉兒の 1882 (明治 15) 年の日記に，中津川の平田門人の 33 名が自由党に大挙して入党したことが記されている[25]。この当時の中津川の平田門人は 37 名程度といわれているので，ほとんどの門人が自由民権の流れに合流していったといえる。この入党者は，板垣退助の東海遊説の際の東濃での状況を詳細に報告した「探偵上申書」に「自由党に加入スルモノ[26]」と記録されている中津川在住の 37 名と，ほぼ重なっていると思われる。この名簿には，中津川国学の重鎮であった市岡殷政の名はみえない。殷政をはじめとする若干名を除いて，平田門人のほとんどが一挙に自由党に入ったのである。

中津川における国学グループの自由民権への移行については，従来から伊那・飯田の自由民権運動との関係が指摘されている。また，前述したように，長谷川昇は，「世代論的視点」から，この移行の契機を解明しようとしている。ところが，長谷川が「もはや思想的移行を必要又は可能とする年令ではなかった」という間元矩，勝野吉兵衛，高木伝兵衛など 20 歳代末から 30 歳代の平田門人も，先の「探偵上申書」では，自由党のメンバーとして記載されている[27]。この名簿でみると，中津川自由党は，国学グループという共通点とともに，縁戚関係で結ばれた村内支配層のグループという側面も強いように思われる。したがって，国学から自由民権への移行を，純粋な思想的契機でのみ把握するのは一面的といえるかもしれない。しかし，非常に若い平田門人のみが，自由民権への思想的移行を行なったとみるのではなく，市岡殷政など古い世代の極く一部を除いて，中津川の平田国学グループのほぼ全員が自由民権の流れに合流あるいは接近したとみるほうが事実に近いように思える。それでは，平田門人を自由民権運動へとかりたてた，すなわち思想的移行といわれる動きをもたらした内在的な契機は何であったろうか。

その素地には，勤皇派志士と行動を共にする国学者を生み出した幕末期以来の伝統があるともいわれる。さらに，平田門人としての新政府への期待が裏切られたことの反動とみる考えもある。それにしても，中津川の自由民権運動は，いまのところ政治的運動としてのイメージはいまひとつ不鮮明である。本稿では，農村における知識層の啓蒙運動としての側面からこの点を考察してみたい。

関東の農村の自由民権期の資料を精力的に発掘し，先駆的な研究を発表している色川大吉は，文明開化は日本の農村には，約 10 年遅れて達したとし，「文明開化と自由民権は (中略) 同じ時期 (明治十年代) に，重なりあい，絡みあって機能した」ことを指摘し，この時代が「日本の農民階級にとって，まさに未曽有の学習熱時代[28]」であったことを強調している。いいかえれば，農村においては，思想的・文化的な啓蒙の時代

であったのである。

ところで，前述したように，平田国学は近代的世界観や科学をわかりやすく農村で啓蒙するという性格をもっていた。その点からみれば，農村における啓蒙の時代は，中津川においては，平田国学受容とともに，1850年代後半から始まっていたということもできる。平田国学から自由民権へと展開する思想運動は，農村における啓蒙運動として連続的な枠組で理解することもできるのではなかろうか。

前述した「探偵上申書」で板垣退助の東海遊説の一行を迎えての「恵那郡中津川村懇親会ニ臨ムモノ及ヒ自由党ニ加入スルモノ」として記載されている54名をみると，学校教育関係者や医者が目につく[29]。党員として記されているうち，小林廉作[30]は，中津川村の小学校であった「興風学校」の校長，菅井三九郎，遠山林蔵は当時同校の教員，岩井織之助は元教員，市岡政香は学務委員を務めていた。また，懇親会臨席者として記されている市川元太郎は，当時同校教員であった。1882(明治15)年4月の時点で，「興風学校」の教員の半数近くが，自由党の関係者であったのである。そして，党員として記されている者のうち，林淳一，間島秀一[31]，花岡麗左右が医者であった。

小林廉作，菅井三九郎，遠山林蔵の教員グループは，高木勘兵衛とともに岩村まで板垣退助一行を出迎え，同地の懇親会に出席している。さらに，菅井は岐阜まで一行を送っている[32]。板垣一行を迎えての中津川での演説会は，市岡政香が会主となって開催され，最初の演者として林淳一が登壇している。演説会は，内藤魯一の演説に至り中止解散を臨監の警察官から命じられたが，林淳一を会主として再開されている[33]。また，中津川では，この演説会と並行して懇親会がもたれているが，これを実施した中心メンバーは，市岡政香，林淳一，菅井三九郎といわれている[34]。一方，「探偵上申書」では，「小林煉作，市岡政香等ノ七八名ヲ除ケハ他ハ皆人ニ党スル者ニシテ決シテ基主義ニ党スルモノナシ[35]」と報告されている。小林廉作も，中津川自由党の指導的なメンバーの一員であったことが推定される。

ところで，これら教育関係者の自由党員のうち，市岡，小林，菅井はかつて平田門に入門した国学者であった。そして，後述するように，1872(明治5)年，市岡が自宅を開放して「時習館」と称する学校を設立[36]し，小林廉作をむかえて以来，中津川の近代学校教育の形成は，市岡，小林を中心に進められた観がある。こうしてみてくると，1860年代の平田国学の展開，1870年代の学校教育の形成と普及，1880年代の自由民権運動，それらは，市岡，小林を中心とする人々の近代思想・学問の受容過程であり，思想形成の過程であったといえる。

中津川の自由民権運動は，教育関係者や医者といった村内知識人が指導的役割をになっている。たとえば，1882(明治15)年9月以降は，菅井三九郎，林淳一を中心として，中津川でしばしば演説会が開催され，1883(明治16)年1月までに，13回，46の演題で行なわれ，のべ2,597人の聴衆を集めている[37]。また，1882(明治15)年12月には，菅井，林らは自由主義新聞の発刊を計画している[38]。このように，地域での啓蒙活動が活発に行なわれている点が注目される。そして，こうした活動は，幕末期以降の平田国学の農村啓蒙運動の伝統が背景にあったようにも思われるのである。村内知識層は，平田国学の教養を，窓口あるいは踏み台として，近代的学問や思想を受容していったと思われるが，その発展の延長上に，1882(明治15)年を中心とする中津川の自由民権運動があったといえるのではなかろうか。

(2) 近代学校の形成過程

中津川では，1846(弘化3)年から1871(明治4)年まで，馬島靖庵，市岡殷政，宗泉寺の住職を師匠として，寺子屋が開設されていたが[39]，1872(明治5)年10月には，市岡政香の自宅を借りて「時習館」と称する学校が設立された。教師は，小林廉作と土屋源右門で，小林が国学・漢学の内容を教授し，土屋が珠算を教授した[40]。この学校は，1873(明治6)年5月に，「学制」に

もとづく小学校として認可され，「興風義校」と称された。中津川村周辺の4か村にそれぞれ支校をもち，本校はひきつづき市岡政香宅に間借りしていた。教師は支校を合せて12名で，その中心は小林であった[41]。1873(明治6)年10月には，本校校舎を村内の村芝居の劇場に移し，翌年7月からは，「学制」の「小学正則」にもとづいて授業を行ない。「興風学校」と改称している[42]。

1879(明治12)年9月に，「教育令」が公布された。これはいわゆる「自由教育令」と呼ばれるように，各学校毎にかなり自由な教科課程が編成された。「興風学校」では翌1880(明治13)年ごろ，「教育令」にもとづいた「教則」がつくられている。しかし，「自由教育令」の時期は短く，1880(明治13)年12月には，「教育令」が改正され，学校教育の国家統制が強められた。そして，翌年5月，文部省において「小学校教則綱領」が制定され，各府県はこれにもとづき教則を定め，管内の小学校で実施させた。岐阜県では，1882(明治15)年3月29日に，「岐阜県小学校教則」及び「岐阜県小学校教科書表」を定め，管内に通達している[43]。これ以降，小学校教育の国家的統制は急速に強められ，教科課程における大幅な自由は認められなくなった。この点は，中津川の「興風学校」の場合も例外ではない。

i)「興風義校」の性格

小林廉作は，1872(明治5)年の「時習館」以来，「興風義校」「興風学校」，その後身の「中津川小学校」，「中津川尋常高等小学校」と28年間にわたって校長を勤めている[44]。中津川の近代小学校の形成過程は，そのまま小林廉作の教員としての自己形成過程であった。

小林は，1848(嘉永元)年の生まれで，1872(明治5)年には24歳であった。出身は，木曽福島に代官所を置き，中津川を含めて木曽一帯を支配して尾張藩に属していた山村氏の家臣である。1859(安政6)年から1862(文久2)年まで，山村家の儒員の武居拙蔵のもとで漢学等を学び，1869(明治2)年に平田国学の門人となっている[45]。

こうした小林の教養は，「時習館」および「興風義校」の教育活動の性格を決定せざるを得なかった。たとえば，「興風義校」の蔵書をみると，『古事記』，『八代集』，『玉襷』など国学に関連したものや『四書』，『五経』，『孟子』など漢書が多い。ただし，新規購入図書として，『西洋事情』，『万国公法』，などの近代思想の啓蒙書や，『博物新編』，『化学入門』，『地球説略』などの近代自然科学の入門書が掲げられている[46]。国漢学を教養の基礎としながらも，近代的な学問や科学を受容していこうとする姿勢がうかがえるのである。

ii)「興風学校」の性格

1874(明治7)年に入ると，近代的教育内容への転換がみられるようになる。小林廉作は，1874(明治7)年に岐阜県師範研修学校で，短期の再教育を受け，同年6月小学師範科を卒業し，7月に再び「興風学校」の教員となっている[47]。小林は，師範研修学校で近代的な教員養成を受けたのであるが，このことは，「興風学校」で「学制」の「小学正則」を採用することを可能にした。

しかしながら，この時期には，まだ，「興風学校」において，国学イデオロギーの影響がみられる。たとえば，「学制」の「小学正則」を採用し，近代的学校として発足した1874(明治7)年においても，開業式で，「神祭之式」が行われている[48]。

ところが，明治10年代にはいると，「興風学校」の啓蒙開化主義的な性格は，かなり明瞭になっている。1880(明治13)年頃には，「興風学校教則[49]」が定められている。これによると，教科課程は，男女毎に，下等(第6級から第1級までの3か年課程)，上等(第4級から第1級までの2か年課程)，高等(第6級から第1級までの3か年課程)に分かれている。この教科課程の特徴をまとめると以下のようになる。

a.「読法」を，下等第6級から第3級(後の第1・2学年)でしか課していない。

b.「修身」の時間数が多く，ほとんどの学年で週5時間課している。

c．下等の後半から上等にかけては，「地理」「歴史」が重視され，それぞれ週4時間から5時間課している。

d．上等の後半から高等においては，「物理」「博物」「化学」「生理」など自然科学の学科を広く課している。

e．下等小学の段階では，「実物」と称す学科を設け，口授や図解によって自然現象についての初歩的な知識を教授している。

f．「作文」では，男子に『詩経』，女子に『古今集』などを講説している。

この教則はb，fの特徴にみられるように，必ずしも近代科学や学問を教授するだけの内容ではなく，国学的な学校観が若干反映されているとみられる。しかし，全体としてみれば，近代的な科学や学問が大部分を占めている。しかも，読，書，算といった基礎的知識よりも，社会や自然に関する学問的内容が重視されている。いわば百科全書的な啓蒙開化主義の教育観にもとづく教科課程となっているのである。

この点は，教科課程表とともに掲げられている教科書表[50]からも明らかである。そこにあげられている教科書のほとんどは，1874 (明治7) 年から1880 (明治13) 年に出版された歴史，地理，経済および自然科学の入門書である。

ところで，「興風学校」のこの啓蒙主義的な性格は，何よりも小林廉作の教育観・学問観によるものだと思われる。小林は，1879 (明治12) 年12月の卒業式に，校長として訓示しているが，そこで次のように述べている。

「学フ所ノ学課ハ歴史ノ世運形勢ヲ察シ地理書ノ世界風土ノ各種ナルヲ了知シ数学ノ物理ヲ測リ理学ノ万物ノ形状変化ヲ講究シ化学ノ物質分合ノ妙機ヲ探リ文典ノ文法ヲ論シ生理学ノ身体ノ構造位置ヲ検査シ且健全ノ道ヲ知リ修身学ノ人間交際ノ道ヲ講スル経済学ノ国家ヲ経理スル其他習字作文博物学等皆世間有用ノ学問 (中略) 苟モ開明国ニ生レテ交際ノ道ヲ知ラントスルトキハ必此普通学ヲ学ハサレハ不可ナリ[51]」

まさに，百科全書家的な啓蒙主義の思想である。

小林廉作が平田国学から出発して，こうした思想を身につけるに至ったのはどうしてであろうか。おそらく，2度にわたって受けた師範学校での教育が関係しているのではないかと思われる。小林が再び近代的な教員養成を受けたのは，1877 (明治10) 年であった。同年6月，一旦，「興風学校」教員を辞し，岐阜県師範学校高等科に学び，翌年4月に卒業し，「興風学校」にもどっている[52]。

そして，小林は，こうした教員養成を経て，この時期以降，しだいに恵那地方の教員の間でも重きをなすに至っている。1882 (明治15) 年に，小林廉作には，学校関係者から次のような評価が与えられている。

「明治七年七月訓導試補ヲ以テ本校ニ派出以来勤続殆ント十年勤勉生徒ヲ教育スルノミナラス次席数員以下補員ヲ誘導研究セシメ退場ノ後ト雖モ有志ノ子弟ニ教誨ヲ自家ニ授クル等実ニ教員ノ名ニ背カサルヘシ故ニ生徒進歩ノ実蹟モ顕レ屢ハ本県ニ具申シテ遂ニ三等訓導ニ昇級セリ其間一時衰頽セントシタル本校ヲ維持回復スルニ当リ与ツテ力アリ啻ニ本校一校ノ子弟ヲ教育スルノ教員ニ非ス我恵那全郡ノ教員ヲ善良ニ教誨スルノ教員ト謂フヘシ[53]。」

この小林廉作のもとで，のちに，中津川の自由民権運動の中心メンバーとなる菅井三九郎が，1880 (明治13) 年から1882 (明治15) 年まで3年間，「興風学校」教員として勤務している[54]。彼は，小林と同年 (1869〔明治2〕年) に平田門に入門しているが，年齢は小林より7歳下である。林淳一，市岡政香なども小林より7歳～9歳年少である。小林は師範学校で学んだ知識人として，菅井をはじめとして，市岡や林にも学問的，思想的に大きな影響を与えたと推測されるのである。

さらに，中津川の国学グループが，全体として自由民権の流れへ思想的に移行していく契機をもたらしたのが，「興風学校」の近代的な教育，さらにいえば，小林廉作の近代的な思想・学問ではなかったかと思われる。「興風学校」の役員 (学校取締，監事，主者，学務委員など時期によっ

て名称が異なる)は,「時習館」の時代から,市岡政香,肥田通一,高木伝兵衛,成木来助,高木滝二郎,菅井守之助,間杢右衛門などの村内支配層が占めていた[55]。彼等は,平田門国学者のグループであるとともに,1882(明治15)年4月の時点には,ほとんどが自由党の関係者となっている。彼等が,自由民権へと思想的移行を示した背景には,小林廉作を中心とする「興風学校」の近代的な思想・学問の啓蒙活動があったのではないかと思われるのである。

(3) 1882年以後

1882(明治15)年6月,集会条例が追加改正され,政治結社の支社設置および結社の連合の禁止,学術会等の名義での集会の規制などが定められた。これにともない同月,濃飛自由党は解散を余儀なくされ,濃飛自由党員の一部は,直接中央の自由党に加入した[56]。この時,中津川の自由党関係者は,1882(明治15)年10月に,15名が一挙に入党しているが,板垣退助を迎えての懇親会の実情を報告した「探偵上申書」で,自由党員とされている者のうち,このとき中央の自由党に入党したものは,菅井三九郎,林淳一,高木勘兵衛,勝野又蔵,菅井守之助の5名にすぎない。市岡政香,小林廉作をはじめ自由党関係者の多くが,中央の自由党には加入していない。また,この時,中央の自由党に加入している者は,規模の大小はあるが商業を営んでいる者が多い[57]。中津川の自由党グループの性格には,集会条例の改正を契機として,なんらかの変質があったのではなかろうか。

1882(明治15)年以降の民権運動の取締りは,教員に関して,より徹底して行なわれた。すでに1880(明治13)年の集会条例において,公・私立学校の教員・生徒等の政党加入は禁止されていたが,岐阜県では,1882(明治15)年5月以降,教員の政党加入,集会での演説が徹底的に取り締られた[58]。したがって,菅井三九郎は自由党に加入するため,1882(明治15)年に「興風学校」教員を辞職し[59],他方,教員をつづけた小林廉作は,自由民権の活動から離れざるを得なかったのである。

自由民権運動の弾圧と並行して,学校教育の国家統制も強化されていった。1880(明治13)年の「教育令」の改正で,小学校の教科課程の基準としての「小学校教則綱領」を文部卿が作成・領布し,府知事県令がこれに準拠した各府県の「小学校教則」を編成して文部卿の認可を受けることにとなった。すなわち,教科課程編成権が学校から府県,文部省へと吸い上げられたのである。以後,小学校の教育課程行政は中央集権化が進み,国家的統制が強められている。

岐阜県でも,前述したように,1882(明治15)年3月に「岐阜県小学校教則」が定められた。これ以後,中津川の「興風学校」でもこの教則の実施を余儀なくさせられている。小林廉作の理想による啓蒙主義的な教育は,ここに至って,その発展の途を閉ざされてしまうのである。その意味で,1882(明治15)年は,「興風学校」の転換点であった。たとえば,1882(明治15)年前後には,小林廉作を除くほとんどの教員が辞職し,新しい教員が赴任している。自由民権運動に関連するものなのか否か不明であるが,少なくとも,「興風学校」の変化を象徴しているようである。

ところで,中津川の民権運動は,1882(明治15)年後半以降翌年にかけて,林淳一,菅井三九郎を中心として,演説会が精力的に取り組まれているが,それ以後は,民権運動の活動は終息に向かう。中津川の民権運動は,まさに1882(明治15)年をピークとする「瞬間的昂揚[60]」といわれる性格をもっている。これは,中津川の民権運動に内在する限界に由来するように思われる。この限界は,中津川の民権家の思想の底流に,平田国学以来の尊皇思想が根強く存在したことと無関係ではなかろう。たとえば,1878(明治11)年の,中津川への天皇巡幸の際,市岡政香,肥田通一,高木滝二郎は,歌を献じ,感激の意を表したといわれている[61]。こうした尊皇思想にもとづく天皇観・国家観が,中津川の民権運動の性格と深く関係していると思われるが,この点の検討は今後の課題である。

ま と め

平田国学は，今日，皇国イデオロギーの元祖として評価される傾向があるが，近代的な世界観や科学をとりこむなど，その学問水準は，近世後期の農村においてはかなり高いものであった。しかも，その学問内容は，広範囲にわたる百科全書的なものであった。したがって，平田国学の運動は，幕末期の農村における啓蒙運動としての性格をもっていたと思われる。中津川の豪農層はこの平田国学の教養を窓口あるいは踏み台としながら，明治以後，西欧の近代思想・科学を受容していったと思われる。

さらに「興風学校」を近代学校として発展させていく過程において，中津川に啓蒙開化思想が普及させられている。その際，重要な役割を果したのは，近代的教師として養成され，国学の素養の上に近代的な思想・科学の教養を身につけた小林廉作であった。そして，小林は，1882 (明治 15) 年に高揚する中津川の民権運動の指導者のひとりでもあった。中津川の民権運動は，教育関係者，医者といった村内知識人が中心になって組織している。とりわけ，小林廉作，菅井三九郎，市岡政香といった教育関係者が指導的な役割を果している。したがって，中津川の豪農層の国学から民権運動への思想的移行に影響を与えたのは，小林を中心とする教育関係者 —— 彼等は若手の平田門人であった ——と考えられる。そして，小林廉作によってもたらされた近代思想や科学は，こうした思想的移行を媒介する働きをしたと思われるのである。

とはいえ，そうした思想的移行は段階的に進んだのではないであろう。それぞれの思想的特徴や性格は同居し，融合しながら変遷していったと思われる。したがって，国学的イデオロギーの要素は啓蒙思想にも民権思想にも色濃く残存していると考えられる。この点についての詳しい検討は今後の課題である。また，学校教育関係者の民権思想の受容とその普及のプロセスについては，推論によった部分が多い。小林廉作の思想形成過程を含め，資料的にこの部分を補充しながら，さらに実証的に論証するのも今後の課題としたい。

なお，本稿は，当初，自由民権運動と教育を対象として，岐阜県の西濃地域と東濃地域を比較検討する予定であったが，結局，東濃それも中津川だけしか取りあげることができなかった。最後になったがお詫びしておく。

1) 青木健児「岐阜県における自由民権運動(2)」，岐阜史学会編『岐阜史学』第 25 号 1959 年 pp.36-37.
2) 芳賀登『「夜明け前」の実像と虚像』教育出版センター 1984 年 pp.245-255.
3) 長谷川昇「平田門国学者の民権運動への移行について」，日本私学教育研究所編『日本私学教育研究所紀要』第 7 号(2)教科篇 1972 年。
4) 梅村佳代「民衆の公教育組織化運動について ——郷学校を中心に ——」，名古屋歴史科学研究会編『歴史の理論と教育』NO.37 1974 年。梅村「自由民権期における民衆運動と公教育形成 ——岐阜県の事例を中心として ——」，『暁学園短期大学紀要』第 11 号 1975 年。梅村「豪農民権地域における民衆の公教育組織化運動について」，教育運動史研究会編『季刊教育運動研究』創刊号 1976 年。
5) 前掲「豪農民権地域における民衆の公教育組織化運動について」p.43.
6) 同上
7) 堀浩太郎「明治前期の小学校をめぐる問題 ——『興風学校日誌』を中心に ——」，名古屋大学大学院教育学研究科教育学専攻院生編『教育論叢』第 20 号 1977 年 p.166. そのほか，仲新・伊藤敏行・上沼八郎・久原甫・内田糺「東海地方における近代学校の発達 (第 1 報告) — 岐阜県を中心として —」，『名古屋大学教育学部紀要』(第 6 巻 1960 年) でも，小林廉作を「当時の典型的な一教師」(p.67) として紹介している。
8) 芳賀登『幕末国学の研究』教育出版センター 1980 年 p.44.
9) 前掲『「夜明け前」の実像と虚像』p.162.
10) 同上書 pp.164-174.
11) 岐阜県恵那郡教育会編『恵那郡史』1926 年 (1973 年複刻 大衆書房) pp.373-384.
12) 北小路健『続木曽路文献の旅』芸艸堂 1971 年 pp.221-252. ここで，北小路は，中津川商人 (間秀矩と同族の間矩友ら) が，横浜で生糸交易を試みた資料を紹介している。
13) 前掲『岐阜県における自由民権運動(2)』p.37.
14) 前掲「平田門国学者の民権運動への移行について」p.60.
15) 同上
16) 同上論文 p.63.
17) 同上
18) 同上論文 p.62.
19) 同上論文 pp.63-64.
20) 島崎藤村『夜明け前』第二部第十章の三.
21) 北小路健『木曽路文献の旅』芸艸堂 1977 年 pp. 129-130.
22) 同上書 p.130.

23) 佐野正巳『国学と蘭学』雄山閣出版　1973年　p.4.
24) 同上書　p.13.
25) 前掲『『夜明け前』の実像と虚像』p.252.
26) 国立公文書館所蔵『公文別録』(明治十五年) の「一 板垣退助遭害一件」中の「岐阜県上申自由党総理板垣退助遭害ノ件　自第一号至第五号」に収められている「探偵上申書」(御嵩警察署在勤の御用掛岡本都嶼吉の密偵報告である。)，井出孫六・我部政男・他編『自由民権機密探偵史料集』三一書房　1981年所収，p.33.
27) 長谷川は，中津川の自由党のメンバーを，静岡県立中央図書館葵文庫所蔵「明治十六年甲部巡察使復命書第五号」(いわゆる「関口議官巡察復命書」，岐阜県立図書館編『美濃国民俗誌稿・関口議官巡察復命書』1968年　所収) に掲げられている自由党員名簿によって判断している。ところが，これは1883 (明治16) 年の時点における中央の自由党員である。「関口議官巡察復命書」には，以下のように解説されている。

「初メ県下ニ濃飛自由党ナルモノアリ，党員凡弐百余人，多クハ過激粗暴ノ徒ニシテ，犯上抗官ヲ以テ自ラ得タリトスルモノナリシカ，去年六月集会条例ノ改正ニ方テ其党総テ解散セリ。是時ニ当テ其党員中ノ重立タルモノ (中略) 五十二人ハ遙カニ東京自由党ニ加名セリ。是レ今ノ所謂自由党員ナリ。」(前掲『美濃国民俗誌稿・関口議官巡察復命書』p.47.)

したがって，ここに掲げられている自由党員名簿は，1882 (明治15) 年以前に，濃飛自由党あるいは地域的な自由党のメンバーとなった者すべてを含んではいない。それらの一部あるいは新規に入党した者にすぎない。

それに対し，先に述べた「探偵上申書」に掲げられた自由党員は，密偵報告書であり不正確な部分もあるかと思われるが，濃飛自由党員あるいは中津川地域で結成された自由党員であると推定される。
28) 色川大吉『増補明治精神史』黄河書房　1968年　p.383.
29) 前掲『自由民権機密探偵史料集』p.33.
30) 「探偵上申書」では，「小林煉作」と記されている。「廉作」の誤記であろう。
31) 間島秀一は，馬島靖庵の息子である。
32) 前掲『公文別録』(明治十五年) 所収の「一 板垣退助遭害一件」中の「岐阜県上申自由党総理板垣退助遭害ノ件　自第一号至第五号」に収められている警部長の川俣正名の岐阜県令への報告文による。前掲『自由民権機密探偵史料集』p.60.
33) 同上書 pp.61-62. および，武藤貞一『板垣伯遭難記』　1918年　pp.12-16.
34) 前掲，川俣正名警部長の岐阜県令への報告文。前掲『自由民権機密探偵史料集』p.62.
35) 同上書　p.30.
36) 岐阜県中津川市立南小学校編『興風八十年』1955年　p.4.
37) 前掲「関口議官巡察復命書」，前掲『美濃国民俗誌稿・関口議官巡察復命書』pp.30-46.
38) 1882 (明治15) 年12月12日付『岐阜日々新聞』，前掲「岐阜県における自由民権運動(2)」　p.37. による。
39) 前掲『恵那郡史』p.360.
40) 前掲『興風八十年』p.4.
41) 中津川市立南小学校所蔵「興風学校文書」中の「小学義校開業願書」。
42) 前掲『興風八十年』p.142.
43) 前掲「東海地方における近代学校の発達 (第一報告)」p.79.
44) 前掲『興風八十年』p.20.
45) 前掲「興風学校文書」中の小林廉作の「履歴」による。
46) 同上文書中「小学義校開業願書」。
47) 小林廉作の「履歴」。
48) 前掲「興風学校文書」中「興風学校日誌」，前掲『興風八十年』p.130. に部分的に資料として掲載されている。
49) 前掲「興風学校文書」所収。(前掲「東海地方における近代学校の発達 (第1報告)」pp.77-82 に資料として掲載されている。)
50) 同上文書所収。
51) 前掲「興風学校日誌」，前掲「明治前期の小学校をめぐる問題 ――『興風学校日誌』を中心に ――」p.163 より引用。
52) 前掲，小林廉作の「履歴」より。
53) 前掲「興風学校文書」所収。前掲「東海地方における近代学校の発達 (第1報告)」p.69 の資料より引用。
54) 前掲『興風八十年』p.142.
55) 前掲「自由民権期における民衆運動と公教育形成 ―― 岐阜県の事例を中心として ――」p.119.
56) 前掲「関口議官巡察復命書」pp.47-50.
57) 前掲「岐阜県における自由民権運動(2)」p.37.
58) 前掲「自由民権期における民衆運動と公教育形成」pp.120-121.
59) 前掲『興風八十年』p.143.
60) 前掲「岐阜県における自由民権運動(2)」p.37.
61) 同上論文　p.39.